

KITA

Kitakyushu
International
Techno-cooperative
Association

KITA ニュース

第24号

2005
July
No.24

随想

What's New(KITA理事会状況)

ニュース&レポート

わが社の研修協力記

人気講師の秘訣

KITA研修コースの紹介

KITAの国際親善交流

トピックス



KITA理事会6月24日(金)

随 ZUISO 想 •ずいそう•



(財)北九州国際技術協力協会
コースリーダー
米澤 昌

大欧州の足音

先日欧州エアバスの総2階建て超大型旅客機「A380」の第1号機が完成し公開されました。

TVの報道を見ましたが、標準で550席という物凄い大きな飛行機で何か劇場みたいな広さで、よくもまあこんな巨大な物を造ったものだと驚くと同時にその技術力に脅威を感じました。早速中国が導入契約をしたという新聞記事もありました。

我が国では飛行機といえば米国でしかもボーイングだ、ジャンボだという感覚だったのですが、欧州が共同で開発したエアバスが凄い勢いで伸長してきて、今や受注・引渡し数ともにボーイングを抜いてトップになったとのこと。

EUは昨年5月に中・東欧10ヶ国が新たに加入し25ヶ国となりました。域内のヒト、モノ、カネ、サービスの移動を自由に、経済の活性化を目指し、単一通貨ユーロを導入して、人口は4億5千万人、GDPは我が国の2.5倍という大きな経済圏を生み出しました。

これからも更にルーマニア、ブルガリアなど中・東欧諸国が加入し、そのうえイスラム圏のトルコも仲間に入れるのかどうかと言われ、最近話題となったウクライナまでも加盟を目指したいと宣言しております。

親日的な国が多い中・東欧諸国がメンバーになるのは我が国にはプラスと思います。既に日本企業は家電メーカーなど積極的に進出しており、自動車も展開されております。これからも益々増えていくことでしょう。今後ともより親密な関係を築いていくことが重要となってきます。

世界のリーダーは米国で行方を決める超大国だと思われてきましたが、世界は多極化し、ぼっ興する中

国も一方の旗頭ですが、大欧州であるEUこそ、これからの世界のもう一方のリーダーとなるのではないのでしょうか。今、1US\$は106円で、1ユーロは130円です。これが如実に表しております。

しかも彼等は中国とは親密です。対中貿易相手国もEUがトップです。A380も良い例です。

どんどん東へ向かって進軍してきているのではないかと思います。

これまで米国に軸足を置いてきた我が国が、大欧州となっていくEUに対しどのように対応していくのか、これからの我が国の進路をしっかりと認識しておくべきではないでしょうか。

それにしても文化も人種も異なる25ヶ国の人々が単一通貨ユーロを使い、一体化して経済を活性化していることには、本当に驚愕しますし、又敬意を惜しみません。

周囲を海に囲まれ国境の無い我が国で育った私には理解し難い思いです。やはり地続きというのが人々のあらゆる垣根を取り払うのでしょうか。

ブリュッセルで売られている絵葉書にEU各国の国民性を次のように書いてあるそうです。

アイルランド人のようにいつもシラフで、イギリス人のように料理が上手で、フランス人のようにいつも謙虚で、イタリア人のように秩序正しく、ドイツ人のようにユーモアを解し、オランダ人のように気前よく、ベルギー人のように勤勉で、デンマーク人のように思慮深く、スウェーデン人のように柔軟で、フィンランド人のように地味で、ポルトガル人のように技術に強く、オーストリア人のように忍耐強く、ギリシャ人のように組織化されている。

KITAの平成17年度理事会開催

去る6月24日(金)に平成17年度KITA理事会が開催されました。

議事に従い、「平成16年度事業報告及び収支決算」について報告し承認されました。続いて「平成17年度事業計画および収支予算」の審議がなされ原案通り承認され、本年度のKITA事業計画が決定しました。

本年1月に就任した河野理事長のリーダーシップのもと、

本年度も途上国の「持続可能な発展」を支援することに積極的に取り組みます。環境管理技術、クリーナープロダクション技術、広範におよぶ工業技術などの長年にわたる蓄積を駆使して、途上国の人材育成、技術協力のニーズに適時・的確に応えていくこととします。

以下は理事会で承認された16年度事業報告・17年度事業計画の概要です。

平成16年度事業報告

JICA研修事業

北九州市に蓄積された環境保全型生産技術(クリーナープロダクション)や、環境汚染対策技術の途上国移転に向けて積極的な活動を展開しました。

平成16年度は、ODA(政府開発援助)予算削減にも拘わらず、昨年度に比較して3コース増の25コースを実施し、研修員は昨年比24名増加の197名、参加国は13カ国増の60カ国に達しました。

1. 研修コースの刷新

JICAの集団研修コースは、徐々に地域別・国別研修コースに切り替えられています。コースの改廃は5年毎に行われます。



平成16年度は6コースが改廃されましたが、内容を刷新した新設計画書がJICAで認められ、平成17年度以降の再スタート開講が決まりました。

2. 海外調査活動

(1)「エジプト・生産性向上研修コース設計」コース受託に伴う現地調査(9/24~10/2)

(2)「ガーナ・中小企業振興」コース受託に係わる現地調査(11/6~11/14)

(3)日韓協同研修「大気・環境保全管理」コース受託に係わる現地調査(1/23~1/28)

韓国国際協力事業体から、JICAの協力を得て、アジア諸国を対象にした大気管理研修コースを協同で開催したいとの申し入れがあり、同種コースを実施しているJICA九州、KITAで担当することが決まり、韓国で打合せました。

(4)タイ・フィリピン帰国研修員フォローアップ調査(3/6~3/18)

JICAが唱える現場主義を研修に生かすため、帰国研修員の活動状況を働く現場で直接取材し、その声を研修業務に反映させることが重要であり、日本国際協力センター(JICE)とKITAの協同でタイ・フィリピンの現地調査を行い、平成17年度の研修改善に役立てるように現在JICAへの提案書を作成中です。

3. 帰国研修員を講師として招聘

「生産性向上実践技術」コースの平成13年度研修員、コロンビア国フリアン氏(ヤマハ発動機の自動2輪車現地組み立て工場勤務)を招聘し、本人が2年間を費やして育成したQCサークル活動の成果を、受講中の研修員に発表してもらい、研修成果の効果的な活用事例として提供してもらいました。研修員の反響も極めて良好で、機会をみて今後も実施したいと考えています。

技術協力事業

1) 中国産業環境協力

(1) 大連市への協力

「大連市のクリーナープロダクション(CP)導入に対する人材育成」研修への研修員受入 JICA・草の根技術協力事業

大連市職員を対象に、9月28日~10月28日に研修を行い、この事業(2名/回×3年)を終了しました。研修員は、この研修でCP活動の重要性を認識し、大連で実施する決意を持って帰国しました。

(2)重慶市への協力

専門家派遣によるセミナー実施と調査

北九州市より受託

10月11日～16日に専門家4名が出張し、IT関連のソフト開発セミナーを開催。特にアウトソーシングで発生しやすい問題点とその克服について、実績に基づく講演は好評でした。

重慶のソフトウェア企業4社の調査結果からわかったことは、日本語が分り、プロジェクトを推進出来るリーダーの育成が課題です。

2)韓国産業技術協力

(1)第11回韓国中小企業技術者専門研修

(財)日韓産業技術協力財団より受託

この研修事業は各方面から高く評価され成果を認められています。研修コースによって定員充足率が低いことが問題でした。

本年度は委託機関の予算削減に伴い、次表のように圧縮して実施しました。

研修コース名	研修人員	研修期間
金属加工技術の品質保証	11名	8月31日～10月22日(53日間)
高付加価値生産性向上技術	12名	同上
中小企業管理者のための生産性向上	11名	同上
設備診断技術と改善法案	6名	同上

(2)第11回九州・韓国経済交流会議

7月15日に熊本市で開催され、KITAの韓国中小企業技術者専門研修事業が評価され、両国政府の協力が約束されました。

3)その他の事業

(1)フィリピン・クリーナープロダクション(CP)導入への協力 国際協力銀行から受託

平成15年度から開講しているJICA研修「フィリピンCP振興」コースに参加の行政、企業の研修生とCP導入の打合せを行いました(4月27日)。

第2回は、セブ市で同地区家具工業会を対象にしたCPワークショップに参加(9月6日～8日)。

KITAから2名の講師が講演。約40名の参加者が真剣に取り組みました。

第3回は、セブ地区のCP実施優良会社表彰のための訪問とマニラ市のパシグ川の視察と浄化フォーラム出席のため出張(9月13、14日)。セブのCP実施企業の調査では、2社について実施しましたが、両社共外資系企業でCP内容も成果が高く現場も5Sが徹底していました。

(2)西日本プラントエンジニアリングシンポジウム2004開催

経済産業省

及び北九州市からの援助により、平成16年10月5日から3日間、北九州国際会議場を中心にシンポジウムを開催。この



西日本プラントエンジニアリングシンポジウム2004

シンポジウムは、地場企業の活力強化と人材育成を目的に平成4年から隔年開催。

「企業体質強化と産学連携の推進」と「地場企業の海外事業進出」をテーマに、大学教授、企業技術者等による講演とパネルディスカッションを、最終日は北九州市エコタウン、学術研究都市、(株)三井ハイテックの見学を実施しました。

3日間の参加者は延べ223名にのぼり、九州各地、関西方面からの参加がありました。

(3)「クウェート技術者の石油関連環境管理・保全技術(水質汚濁防止)」研修 JETRO-アラビア石油(株)

東京での導入教育の後、8名の研修員(エネルギー省:2名、環境庁:4名、石油会社:2名)に、KITAで(平成17年1月24日から2月4日まで)、講義と近隣会社の廃水処理設備及びエコタウンの実習、見学を熱心に行いました。

生産性協力事業

KITA/北九州メンテナンス技術研究会(KME)の活性化

「KITA/KMEセミナー」は、「トライボロジー」を復活開講し、更に「工場内情報ネットワーク構築技術」を新設して、計8講座で実施。受講者は56社から87名で、KME会員各社の人材育成を支援しました。

更に、平成14年秋に発足しました「予知保全研究部会」は、年間6回開催し、参加者は11社から15名の第一線の技術者で昨年度より増加し活発な活動が展開されました。

(1)「KITA/KMEセミナー」の充実<8講座実施>

疲労・強度	4日(24時間)
腐食・防食	4日(24時間)
溶接技術	2日(12時間)



KITA/KMEセミナー「油圧制御」(平成16年10月)

トライボロジー	2日(12時間)
制御技術	3.5日(21時間)
油圧制御	1日(6時間)

- 工場内情報ネットワーク構築技術
1日(6時間)
設備診断技術 2日(12時間)
受講者 延べ56社 87名
- (2)「KITA / KME総会」の開催
(平成16年7月22日)出席者 45名
- (3)「KITA / KME講演会」の開催
(平成16年7月22日)出席者 72名
- 演題 :『北九州市のPCB処理について』
演題 :『ISO機械状態監視診断技術者(振動)認証制度の紹介』

- 演題 :『インバーターの寿命・信頼性』
(4)「KME幹事会」の開催
(平成17年3月18日)幹事10名出席
KME平成16年度活動実績と17年度計画の報告
KME平成17年度講演会の講師選定の協議
「西日本プラントエンジニアリングシンポジウム
2004」実施結果報告
- (5)「予知保全研究部会」の開催
今年も引き続き2名の講師の指導で年6回開催。
参加者は11社から15名の第一線技術者でした。

環境協力事業

- 1) 環境関係国際研修
スラバヤ市・天津市環境保全研修 各市1名
北九州市より受託
- 2) 企画調査
(1) インドネシア国スラバヤ市における分別収集・堆肥化による廃棄物減量化への支援
環境再生保全機構地球環境基金助成事業・JICA技術者派遣事業
スラバヤ市の一般廃棄物減量化のため、堆肥化技術の普及と環境教育のモデル施設を作って、住民参加の分別収集と堆肥化を実施して、市民の関心と理解を得ました。
- 
- インドネシア・スラバヤ市における分別収集・堆肥化による廃棄物減量化・リサイクル促進事業
- (2) アジア環境ビジネス商談会の開催 北九州市より受託
平成15年度実施の「ASPRO推進のための都市別環境・産業調査」を踏まえ、平成16年10月に開催された「エコテクノ2004」に併せて、アジア環境ビジネス商談会を開催しました。
- (3) 地球環境市民大学校研修事業
環境再生保全機構地球環境基金より受託
今、地球環境NPO・NGOによる地球市民の存在とその国際的なネットワーク化が求められています。そうしたNGOの支援促進のため、九州・沖縄地区の13団体が活動の成果を発表し、市民との相互交流を図る研修事業を実施しました。

- (4) 中国における環境ビジネス市場調査実施業務
北九州市より受託
中国の環境問題に対処する環境ビジネス市場について、中国企業だけでなく日系企業に対しても調査を行ない、ビジネスの可能性を分析した調査報告書にまとめ、既に北九州市がビジネス交流を行っている天津市・大連市との今後の交流のあり方の基礎資料としました。
- 3) 環境情報の収集・提供
(1) 市民わくわく環境国際協力体験事業
北九州市より受託
市民の環境国際協力意識の向上と実践活動の活性化と草の根活動のネットワーク形成を促進することを目的に、市民に環境協力体験をしてもらう事業を実施したほか、国際実務経験者等を招き、若者を対象に講演やワークショップ形式の座談会を含めたセミナーを開催しました。
- (2) 北九州環境国際協力人材バンク拡充事業
北九州市より受託
- (3) 北九州環境研究会(KISEC)の運営
北九州環境研究会
- (4) 帰国研修員へのニューズレター(Kitakyushu Environmentopia)の作成 北九州環境研究会
- (5) 北九州環境国際ビジネス推進連絡会議運営業務
北九州市より受託
- (6) 日中環境協力情報交流事業
(社)海外環境協力センターより受託
中国の廃棄物処理・リサイクルビジネスに関する事例を紹介し、産学官の日中環境協力に関する情報交流を目的にセミナーを開催しました。

親善交流事業

- 1) 親善交流プログラム
平成16年度JICA研修員受入れ人数は197名で、親善交流プログラムには殆どの研修員が参加して北九州市民との交流を楽しみ、日本の姿を自分の五感で捉えることが

- 出来たようです。
(1) ホームビジット
一般市民の協力を得て、JICA研修員を対象に平成16年度は134名参加しました。ホストファ

技術協力事業 | アジアへの技術協力が続きます

1) 中国産業環境協力

(1) 重慶市への協力

技術者受入研修 北九州市より受託
行政関係者及び企業幹部に技術研修を実施します。

2) 韓国産業技術協力

(1) 韓国中小企業技術者専門セミナー

(財)日韓産業技術協力財団より受託

コース名	研修人員	研修期間
金属加工と品質向上の技術	8名	8月22日～9月30日(40日間)
技術者のための生産性向上技術	8名	同上
中小企業管理者マネージメント基礎	8名	同上
設備の有効活用技術	8名	同上

主催機関(両国産業技術協力財団)、韓国側実施機関との協議で、研修内容を核心分野に絞り、期間を8週間から6週間に短縮し、コース定員を10名から8名に減じて、日本語能力を重視した選考をすることになりました。

8月初めにオリエンテーションによる現状及び問題点の把握を行い、11月終わりにフォローアップ調査でアクションプランの発表と指導を行う予定です。

(2) 韓国中堅企業技術者研修

(財)韓国品質財団からの受託

韓国産業資源部の関係機関である(財)韓国品質財団(Kfq)から、「京都議定書」の発効に関連して、日本における温暖化防止対策への日本企業の取組みと実施例を研修したいとの依頼があり年間2回実施する予定です。

3) その他の事業

「クウェート技術者の石油関連環境管理・保全技術」研修

JETRO-アラビア石油㈱

昨年に続き行政及び企業技術者を対象に2週間の研修を実施。コースは昨年実施の「水質汚濁防止」のほかに、新規に「大気汚染防止」を加え2コースを予定しています。

生産性協力事業 | 地元企業の人材育成に協力しています

KITA / 北九州メンテナンス技術研究会(KME)

好評の「KITA / KMEセミナー」の内容充実、「KITA / KME講演会」の開催、及び「予知保全研究会」の充実等を通じて、KME会員各社の人材育成を図ります。

(1) 「KITA / KMEセミナー」の充実<8講座開講計画>

疲労・強度	4日	(24時間)
腐食・防食	4日	(24時間)
溶接技術	2日	(12時間)
トライボロジー	2日	(12時間)
制御技術	3.5日	(21時間)
油圧制御	1日	(6時間)
工場内情報ネットワーク構築技術	1日	(6時間)
設備診断技術	2日	(12時間)

(2) 「KITA / KME総会」の開催

平成17年7月22日

(3) 「KITA / KME講習会」の開催

平成17年7月22日

演題 : 「企業の法令順守について」

大手町法律事務所副代表 弁護士 中野 昌治氏

演題 : 「静止機械のメンテナンスと診断技術者の役割」

九州工業大学大学院 客員教授 安西 敏雄氏

演題 : 「最近の配管検査技術と三菱化学エンジニアリング㈱の配管管理の取り組み」

三菱化学エンジニアリング㈱ エリア本部

メンテナンス技術部部長代理 工博 永溝 久志氏

(4) 予知保全研究会の開催

本年度参加の10社14名のメンバーに対し、2名の講師の指導で、隔月(年6回)実施予定。

指導講師:

(有)日本診断工学研究所 代表研究者 豊田 利夫氏

九工大 大学院生命体工学研究科 客員教授 安西 敏雄氏

環境協力事業 | アジアとの環境協力がフル回転中です

1) 環境関係個別国際研修

(1) バンコク都・蔚山市環境保全研修 各都市1名

北九州市より受託

(2) 産業排水処理・管理 20名 中東協力センターより受託

2) 企画調査

(1) インドネシア国スラバヤ市分別収集・堆肥化による廃棄物減量化支援事業

環境再生保全機構地球環境基金助成事業

堆肥化技術の普及移転のフォローアップと環境教育実施により、住民による分別収集と堆肥化を

実施し、住民の関心と理解を深めます。

(2) フィリピン・メトロセブ地域での植林による人材育成事業 イオン環境財団助成事業

地域の環境NGOと協力し、植林及び住民啓発セミナーを実施し、環境保全の人材育成を図ります。

(3) 草の根技術協力事業(草の根パートナー型)「インドネシア・スマラン市環境教育指導者育成事業」

JICAより受託

平成16年3月に終了したJICA開発パートナー事業「インドネシア・スマラン市モデル河川環境

改善事業」の成果・評価を受けて、新たにインドネシアで環境教育を推進する事業を実施します。

(4) JBIC 提案型調査「中国・下水道支援における環境保全上の課題及び適正技術移転に関する調査」

北九州市より受託

中国の下水処理場現状を調査し、適正な運営等について提言を行ない、また、下水処理技術の移転及び市民啓発のセミナーを開催します。

(5) タイ・バンコク案件形成促進事業 北九州市より受託

バンコク都で、有機廃棄物をバイオマスとして活用するパイロット事業実施を目指し、ごみ組成や排出量などの情報収集を行い、また生ごみの堆肥化やリサイクルの案件調査・検討を行います。

(6) JBIC 発掘型案件形成調査「ベトナムにおける工場公害対策を目的とした新規円借款案件の発掘と形成」 JBIC より受託

ベトナム繊維産業の環境対策の現状及び金融システムを調査し、CP 推進による公害対策等について提言を行います。また、CP 技術の普及及び市民啓発のためのセミナーも開催します。

(7) 廣野塾「国際協力人材育成事業」(独自)

KITA 自主事業

若い世代を対象に、世界の環境問題や環境国際

協力への関心・理解を深めるための国際協力人材育成セミナーを実施します。

(8) モンゴル・ウランバートル市環境改善事業

JBIC より受託

平成 15 年度実施のウランバートル市ゲル地区における冬季の石炭の生焚きによる大気汚染改善及び健康への影響調査をもとに、CDM 等新規案件への発展性調査を実施します。

(9) 地球環境市民大学校「環境 NGO と市民の集い」

環境再生保全機構地球環境基金より受託

「環境 NGO と企業の連携」をテーマに、九州・沖縄地区の環境 NGO が活動の成果を発表し、企業や市民との相互交流を図る研修を実施します。

(10) 国際環境人材育成事業調査

福岡県事業への専門家派遣

3) 環境情報の収集・提供

(1) 北九州市環境国際協力人材バンク拡充

北九州市より受託

(2) 北九州環境研究会 (KISEC) の運営

北九州環境研究会

(3) 帰国研修員へのニューズレター (Kitakyushu Environmentopia) の作成

北九州環境研究会

(4) 環境国際ビジネスセミナー開催 KITA 自主事業

親善交流事業 | 市民の善意で日本の姿を伝えます

平成 17 年度の親善プログラムは、JICA 委託研修 27 コース・研修員 238 名を対象に実施予定です。1 か月程度の短期コースが年々増加する傾向で、研修員は駆け足ではありますが、北九州市民との善意溢れる親交を体験することになるでしょう。

1) 親善交流プログラム

(1) ホームビジット

JICA 長期コース参加研修員 115 名を対象に実施予定。

登録ホストファミリーに徐々に世代交代の感があり、十数年来の受け入れ家庭が多いなかにあって、新規家庭も少しずつ増えているのは喜ばしいことです。

(2) パスハイク

国際ソロプチミスト北九州及び国際ソロプチミスト北九州西のご支援を得て年 4 回実施します。

国際ソロプチミスト北九州主催 (1 回)、国際ソロプチミスト北九州西 / KITA 共催 (1 回)、KITA 主催 2 回。

(3) 歓迎パーティー「西日本工業倶楽部の夕べ」

市内ロータリークラブ・西日本工業倶楽部・KITA の三者共催で年間 6 回実施します。長期短期を問わず参加可能な全ての KITA 受け入れ JICA 研修員を招待します。

2) 生活情報誌 (Enjoyable Kitakyushu) の改訂・配布

3) 記念アルバム贈呈

研修員からの要望もあり CD-R にも撮影写真を収め研修閉講時に贈呈します。

4) グリーティングカード制作・送付

帰国研修員と KITA を繋ぐものとして、本年も KITA で住所を把握しているすべての研修員にカード送付を継続して KITA の活動を知らせ、近況報告をします。

KITA 広報事業 | 新規事業開拓を目指す広報を内外に展開します

1) KITA ニュースの発行

従来の日本語版国内向け年 4 回発行を、年 2 回発行とし、新たに海外向け新規事業開拓志向の英語版を年 2 回発行する方向で内容検討中です。

英語版は JICA、JETRO、JBIC 等の国内機関及び

その在外事務所や帰国研修員とその所属機関等に送付する計画です。

2) ホームページの充実管理・更新

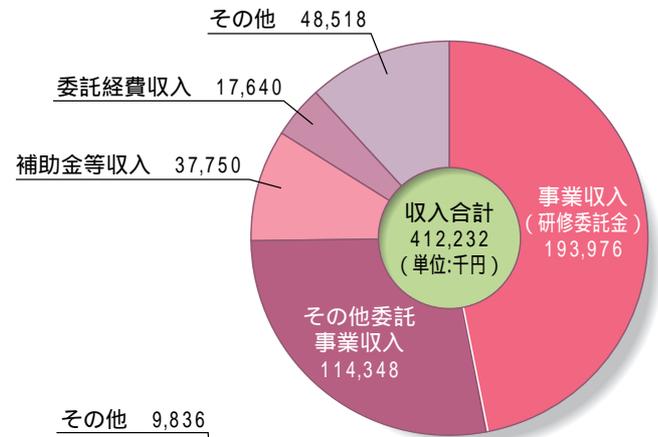
新規事業開拓を目指して、国内外向けに日本語版・英語版の充実・更新が出来るよう内容を検討中です。

平成16年度決算及び平成17年度予算

平成16年度決算(単位:千円)

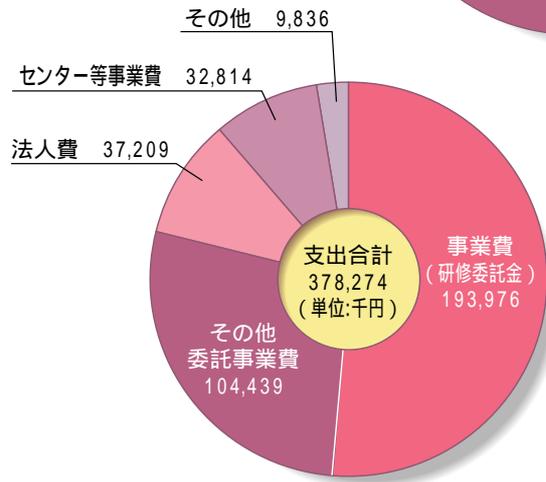
収入

財産収入	2,313
寄付金収入	0
事業収入(研修委託金)	193,976
委託経費収入	17,640
その他委託事業収入	114,348
補助金等収入	37,750
雑収入	46,205
当期収入合計	412,232



支出

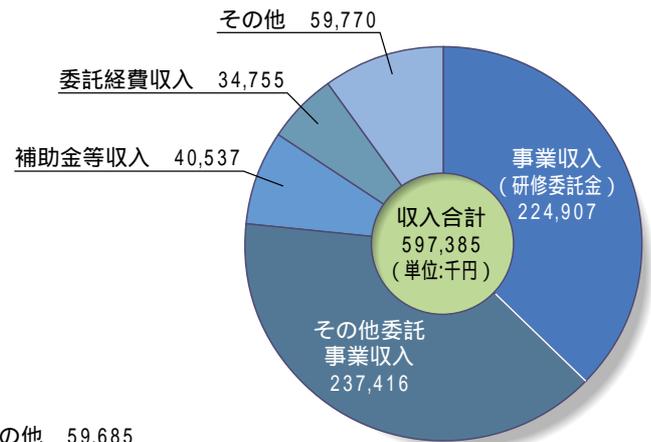
法人費	37,209
委員会費	6,143
事業費(研修委託金)	193,976
センター等事業費	32,814
その他委託事業費	104,439
雑損失	693
基本金繰入	0
KITA25周年記念事業準備金	1,000
退職給与引当預金支出	2,000
予備費	0
当期支出合計	378,274



平成17年度予算(単位:千円)

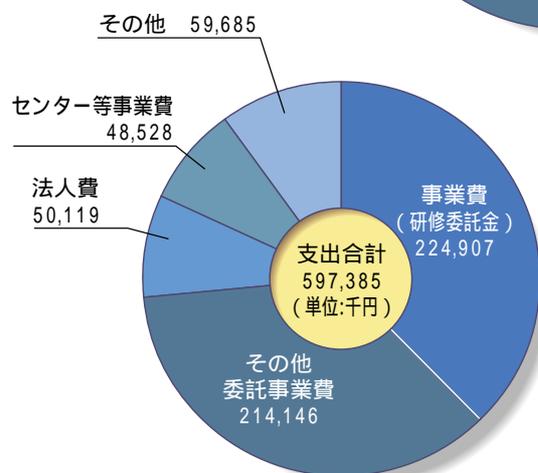
収入

財産収入	3,035
寄付金収入	1,000
事業収入(研修委託金)	224,907
委託経費収入	34,755
その他委託事業収入	237,416
補助金等収入	40,537
雑収入	4,370
25周年準備預金取崩収入	4,000
前期繰越収支差額	47,365
収入額合計	597,385



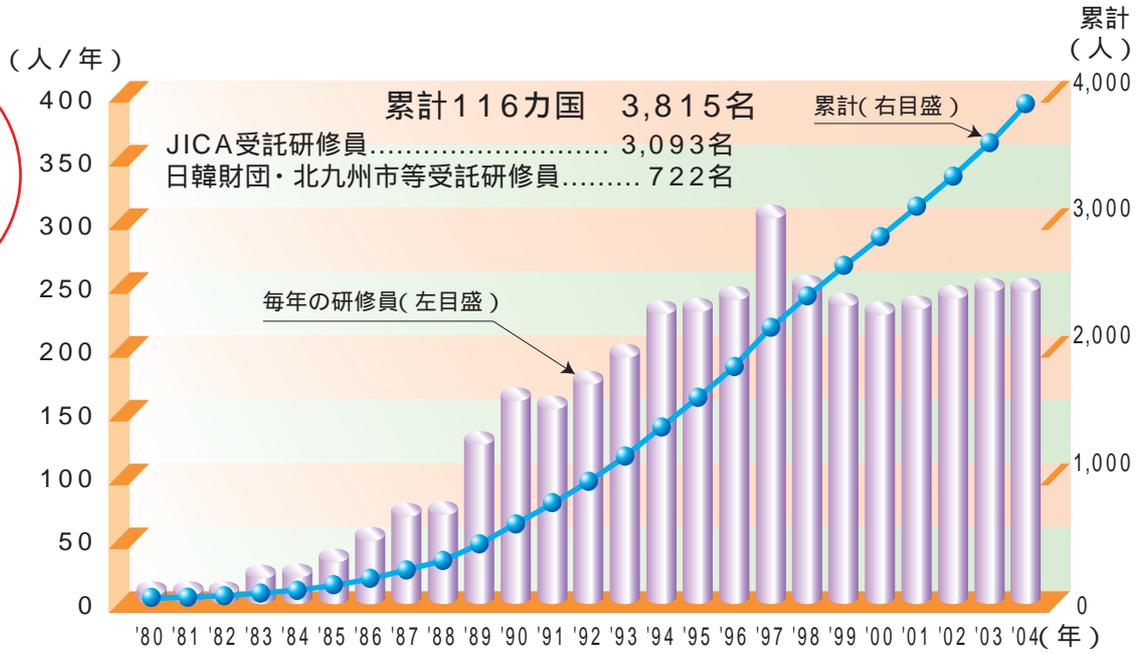
支出

法人費	50,119
委員会費	6,320
事業費(研修委託金)	224,907
センター等事業費	48,528
その他委託事業費	214,146
基本金繰入	1,000
KITA25周年記念事業費	7,000
退職給与引当預金支出	2,000
予備費	43,365
支出額合計	597,385



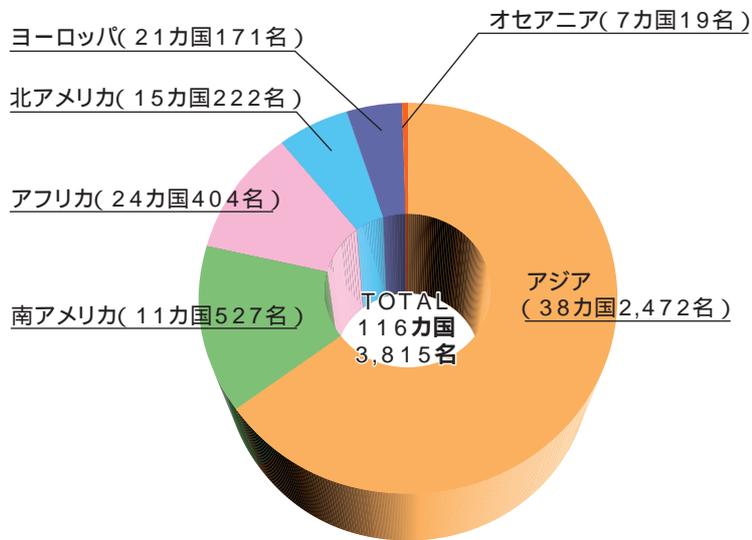
海外研修員受入れ実績

研修員
受入れ実績



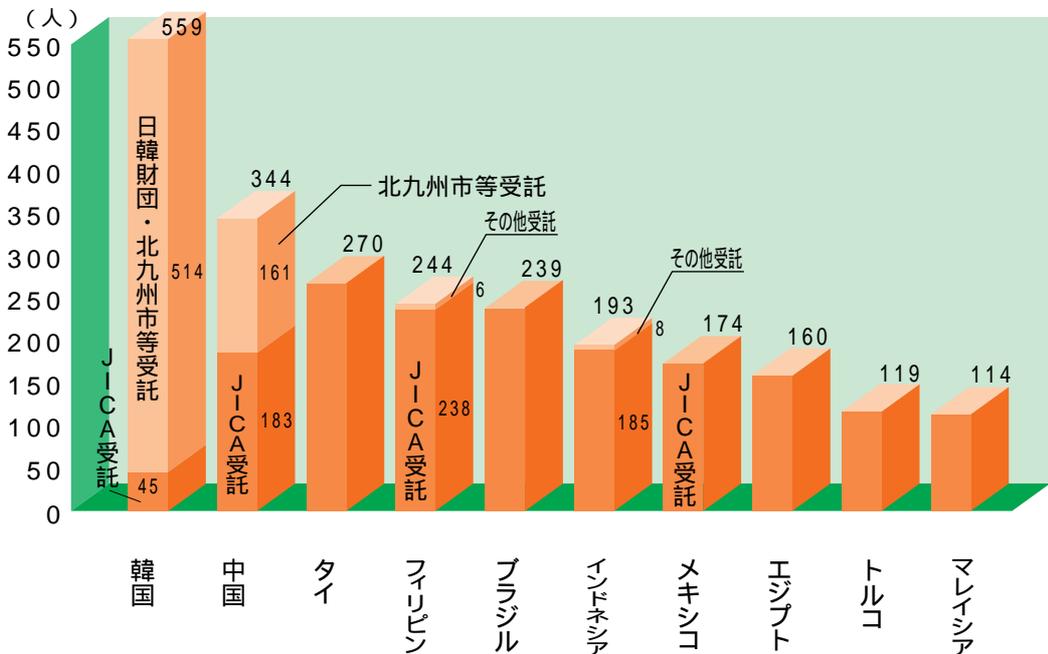
地域別
研修員
受入れ実績

('80~'04年累計)



国別研修員
受入れ実績
上位10カ国

('80~'04年累計)



JICA 研修フォローアップ調査 (効果的な技術移転の実施に向けて)

日本国際協力センター（JICE）の合同調査団の編成にご協力し、3月6日から3月18日まで、フィリピン及びタイに出張して、「自動制御」「産業環境対策」両コースについて調査を行いました。JICA事務所、同窓会事務所、政府機関、帰国研修員、上司にインタビューすると共に現場視察も実施し、日本での研修にたいする各方面からの要望や、帰国研修員の活動状況、アクションプランの実施状況について、アンケートの回答も参考にしながら、内容のある調査を実施することが出来ました。

面談した帰国研修員は10名、アクションプランは、予算上の問題、職場の異動等で実施出来なかった3名を除いて7名が実行中。例えばフィリピンの帰国研修員（金属工業開発センター勤務）は、ココ椰子の実の殻（従来は廃棄物）の繊維を取り出して、自然に優しいロープを製造する機械の開発責任者として、精力的に実験に取り組んでいました。その希望と活力に満ちた働きぶり、私たちに対する好意溢れる対応に、ODAに携わる者の責任の重さを強く感じました。またこのような気持ちはすべての帰国研修員から感じられました。

その他、日常的な相談窓口の開設、JICA ネットによる交流、広報活動の強化等多くの提言をうけましたが、今回の調査結果を、JICA、JICE、KITAで現在取

り組んでいる研修業務の改善に採り入れて、帰国後の支援活動まで含めて、PDCAのサイクルを効率的に展開する方向で推進します。

各方面からのご協力を心よりお願い申し上げます。

(研修部 松本健三記)

出張日程 平成17年3月6日(日)～3月18日(金)

対象国 フィリピン、タイ

出張者	JICE九州支所職員	大野 光明
	コーディネーター	鈴木 牧子
	"	仲村 幸栄
	KITA研修部長	松本 健三
	コースリーダー	川崎 淳司
	"	田嶋 澄夫



ココ椰子の殻の繊維分離試作機(フィリピン・金属工業開発センター)
(平成17年3月)

最近3カ月間(平成17年4月～6月)にKITAで研修修了した5コース41名

(平成17年7月)

	コース名	受託先機関等	KITAコースリーダー (サブリーダー)	KITA研修期間(月/日)	研修人数
クリーナープロダクション	エネルギー管理	JICA	八頭 昭治 (見学 克美)	3/13～5/27	10
	クリーナープロダクションのための保安全管理	JICA	石川 隆 (尾野 春己)	1/17～4/26	7
	クリーナープロダクションのための工業設備のリノベーション	JICA	安藤 雅夫等 (溝部 等)	2/21～6/3	6
	非破壊検査技術	JICA	外山 弘	2/28～6/17	8
	韓国中堅企業技術者研修	韓国品質財団	木下 健太郎	5/23～5/27	9
環境管理	アルジェリア・工業及び都市環境管理	JICA	城戸 浩三	3/14～4/28	10

計50名

日本鉄塔工業(株)若松工場

- 高品質鋼構造物の製作現場の実態研修 -

北九州市若松区北浜1-7-1

高品質・低コストの鋼構造物の製作技術の自国展開を期待して

鋼構造物(例えば橋梁)の製作過程で発生する内部欠陥を、非破壊検査手法で明らかにして対策をとるプロセス実態を10数年前からKITA研修員に教えています。

東南アジア、中近東、中国等からの主として官公庁の若いエリートで、その人の専門分野については深い知識を持っておられると思いますが、鋼構造物自体には詳しくはないように感じられます。しかし、総じて熱心で、明るく、居眠りするような人もなく、何かを国のために掴んで帰ろうとの研修意欲が伝わってきます。

出来るだけ作業現場を見せるようにしていますが、教室での説明のときよりも現場での質問がよく出るのうれしいものです。

数値制御の工作機械を多用して、より安定した品質確保に細心の注意を払っていることを教え、あわせて溶接欠陥の出やすい場所はここですよとの説明もしています。

官公庁の研修員が帰国後役立つようにと、細かな泥臭い内容よりも、課題に対処する「考え方」を理解してく

れるように教えています。

何年か前の研修員で、所属会社の鋼構造物をメッキする釜のトラブル多発で対策に苦慮していた模様で、当社の同じようなメッキ釜の材質成分表(ミルシート)を探し出し、手渡したところこちらの好意が伝わり、大変感謝されたのがうれしく、印象的でした。

長年教えていての悩み・課題は、研修の内容(項目と技術レベル)の是非判断が分からないこと。帰国後何年か経過してからの研修内容の活用のされ方や帰国研修員の反応を知りたいものです。研修成果の実感が伝わってこないの、研修内容の変更が必要かどうか分からない不安がいつもつきまとい、客観的な判断指標がほしいものです。



右からコーポレートセンター業務部長加藤直孝氏、業務部副部長松本信二氏

九州メタル産業(株)

- 最先端リサイクル産業の見学 -

北九州市小倉北区西港町62-4

資源の有効活用に取り組む姿を参考にしてほしい

研修員名簿で経歴を拝見すると、将来、それぞれの出身国で重要な役割を担っていく方々だと感じ、また東欧圏からの研修員にはしっかりした女性が多く、女性進出は日本と比べるとはるかに進んでいると実感しました。

私たちがこのような研修で色々な国の方とお会いできるのは楽しく、普段は当たり前だと考えていることへ疑問・質問を受けることもあり、とても新鮮です。

研修では、1972年の会社設立以来、資源循環型社会構築に寄与するために金属類のリサイクルおよび産業廃棄物処理を通じて、当社が取り組んできた地球資源の有効活用と環境保全が、社会的にどのような重要性を持つかを中心にお話しました。家電リサイクル法や自動車リサイクル法における当社の役割や、約2年前から始めたISOへの取り組み状況も説明しました。現場では当社の代表的な設備であるシュレッダーを見学してもらいました。

金属廃棄物を再び原料として分別リサイクルした当社

の再生原料は、鉄鋼原料として大変合理的かつ経済的であることや、日本の家電リサイクル法、自動車リサイクル法制定の背景を説明し、研修員から「明日はわが国に」という、真剣な姿勢を見ることができたことを大変うれしく思っています。将来、それぞれの母国で大量生産・大量廃棄の時代が来たときには、当社のような事業の可能性を見出してもらえたらと期待しています。

当社は、廃棄物処理において今後ますます高まる地域・社会からの期待に応え、社会の根幹を担った業務展開をしています。そして、国内では環境問題の先端を行く北九州市に本拠地をおく事業者としての責任も感じながら、毎年、この研修に協力させてもらっています。

帰国後、研修員の皆さんがそれぞれの国で活躍して下さることを心からお祈りしています。



取締役経営企画室長権藤正信氏

人気講師の秘訣

研修の不安と悩みとよろこびと

(株)安川電機モーションコントロール事業部
課長補佐 山川 孝之

私がKITAの講師を始めてから十数年が経過しました。外国の方が相手ということから、最初のころはとても緊張し、満足の行く研修内容ではなかったのではないかと、終わった後でいつも気にかかっていた。担当を始めたころは、電気関係出身者以外の方々の理解度は、今ひとつといった印象がありました。しかし、最近では研修を受ける方のレベルが向上したのか、電気出身以外の方々からも質疑があり、しかも的を得た質疑内容なので理解されていることが実感でき、そのときはとてもうれしくなります。

研修時間は午前3時間の座学と午後3時間の実技というのがほとんどですが、インバータを理解して頂くのに3時間では少な過ぎる気がします。さわりだけ流していけば研修項目だけはクリアできます。しかし、これでは後で何も残らないのではないかと考え、理解していただきたいと強く思う項目については、他の部分は犠牲にしても、かなり詳細に講義を行うように心がけています。

研修員の経歴はまちまちで、インバータ担当の、私の研修内容に関係する電気関係出身の方は、とても少ないようです。このような、いろんな分野の方々の集まりに対して、同じように理解していただくためにはどうすればよいか悩みの種です。不可能なことかもしれませんが、研修員の選定を、同じような分野に統一すれば、もっと効果的な研修が行えるのではないかと考えています。

最初のころはKITAの研修が近づくたびに気が重かったのですが、研修員の方は皆さん気さくな人が多く、今では楽しささえ感じるようになりました。「楽しく効果的な講義を目指して」をモットーに、これからもがんばっていきたいと思っています。



講義する課長補佐山川孝之氏(中央背広姿)

つれづれなるままに

(財)北九州国際技術協力協会
KITA環境協力センター次長 内藤 英夫

初めての講師は1986年の「産業環境対策コース」でした。途中で講師を断っていた時期があるので、講師歴は15年です。この間に感じたことを書きます。

1. 英語にだけとられないこと!

資料は全て英語で日本語資料を使うのは言語道断ですが、講義は英語でしなくても良いと思います。厳選された情報を相手に正確に伝えることが出来れば日本語でも十分です。伝わらない英語は百害あって一利なしです。

2. 資料は常に見直しましょう!

進歩のない講義は研修員も分かります。私が講師を中断したのも、講義レベルが維持できなくなったからです。電子媒体を使って分かり易くするのも重要です。研修員に最新の情報を与えても意味がない、古い情報で十分だと思っているなら大間違いです。有益かどうか決めるのは彼らです。

3. 研修員の評判に一々左右されない!

研修員の評価は良い方がいいに決まっていますが、1回の評価に左右されないことです。私も研修員の受けが良くないため、次年度資料を差し替えましたが、結局以前の内容の方が良かった経験があります。悪い評価が何年も続くようであれば内容を全面改定するか、辞めるかです。

4. 持続可能な講師づくりに向けて!

私も職場が替われば講師を引き受けることは難しくなります。若い人に交替し後継者を育てればと思いますが、時間がかかる上、直ぐ異動してしまいます。環境研修は増え続けており、講師不足で新しいコースが開設できないことも考えられます。KITAも行政講師に頼るだけでなく、環境研修に必要な独自の講師づくりについて検討を始める時期に来ているのではないかと感じています。



講義する筆者(左端)

K I T A 研修コースの紹介

(目的とねらい)



JICAコース『コンピューターによる機械制御』

コースリーダー 谷口 政隆

本コースは平成元年に「油圧とその応用コース」として始まり、その後「油圧とメカトロニクス」、「ハイテク産業における機械制御」と名称を変更し、平成16年度より「コンピューターによる機械制御」として技術の変遷に対応して進歩、変身をしてきました。

鉄鋼、化学、自動車、工作機械、半導体等近代産業の発展は、その固有技術の進歩によることはもちろんであります。一方、エレクトロニクスをベースとした多くの周辺技術の発展に支えられてきたところが極めて大きい。特に、マイクロコンピューターの応用は、メカニカルオートメーションの発展に大きく貢献しています。途上国においても機械、電気、電子、制御、情報などの技術が総合的に結びついた高度に自動化された生産設備が導入されつつあります。一方、先進国では工業化の進展による地球温暖化や、資源枯渇などの環境問題が発生し、その問題

解決のため、クリーナープロダクション(CP)への転換が進められています。

本コースでは、環境問題、設備管理、制御、電子、情報等の知識・技術を移転してCPに参画できるメカトロニクス技術者を育成することを目的として、次のことを学びます。

- ・高度化する生産設備に対応した設備管理能力
- ・制御理論(基礎から大学院レベルまで)
- ・各種要素技術(アクチュエータ、制御装置、センサー)
- ・制御理論の実機への適応事例

このコースの特徴は、基礎的なことから、高度な最新の技術までを教え、企業研修でも最新鋭の生産設備を見学するようにしています。このため発展途上国からの研修生にとって、将来に渡って役立つ知識、経験を身につけてもらえるものと確信しています。



JICAコース『ネパール・廃棄物処理』

コースリーダー 黒澤 準一

本コースは平成14年度に開講し、5回(5年)実施することとなっています。今まで3回実施しあと2回を残しています。このコースの特徴は、研修員は帰国後JICA本部の地球環境部第2グループ(公害対策)公害対策第2チームが平成15年度から開始した、「カトマンズ盆地都市廃棄物管理計画調査」のカウンターパートとして参画させられており、研修内容が即、活用されていることです。このような例は、JICAの実施している研修では稀なケースと言えます。

JICAは、「貧困緩和」を最重点課題と位置付けたネパール政府の自助努力を支援するため、4分野をその協力の重点課題に据え今後の事業展開を図ることとしています。

その内の1つが、「持続可能な開発を通じた環境保全」であり、その中に都市環境の改善があります。即ち、都市部の社会インフラの整備、環境保全システムの構築(大気、

廃棄物、排水)です。

カトマンズでは急速に人口が増加し都市化が進んでおり、それに伴いゴミ処理が大きな課題となってきています。ゴミが街のいたるところに放置されており、回収および処分の方法が非効率であることから様々な感染症の原因ともなっています。また、観光業を外貨収入の中心としているこの国において町の景観を損なうことが著しく、観光地としての魅力を半減させている大きな要因となっています。

このような背景のもと、研修員は、ネパール国の首都であるカトマンズ市とカトマンズ盆地内の衛星都市である4市と中央政府の、廃棄物処理に関わる経験ある職員を対象としており、ゴミ問題の本質、問題の所在を理解し、処理計画の立案方法や衛生的な処理方法を学びネパールに適した廃棄物処理システムを構築する能力を培うための「ネパール国別特設コース」として開設されたものです。

KITAの国際親善交流

KITAのホストファミリーと研修員

北九州市八幡東区
中村 実様

出会いとふれ合いを大切に

1980年頃より九大や九工大に留学中の東南アジアの学生との交流を続けているうちにKITAのホストファミリーのを知り、受入れを始めてもう十数年になりましたでしょうか。思いつく限りの景勝地や観光地へのドライブはもとより、温泉まで案内することもありました。

私が小学校の頃憶えたインドネシア語に親しみを感じるのでしょうか、私の家にはホームビジットの本人だけではなくいつも数人、時には10人近い研修員が一度に訪れ、賑やかなホームパーティとなり、母国語の歌も飛び出し底抜けに明るく楽しんでいる姿に、またホームビジットへの意欲が湧きます。また女性の研修員に打掛を着てもらい撮った写真を見て、次々にぜひ着物を着たいと今までに20数人の方が訪れ、中には帰国2日前に来られ、妻は着付けに大忙しでした。数年前帰国した研修員に招かれて彼らの母国へ旅をしました。ジャカルタに着くと大勢の研修員が、「パパ中村」と書いたプラカードを持って出迎えてくれました。その上パーティ会場まで準備して、それぞれの研修員がファミリー同伴で集まってくれました。懐かしい顔々々で驚きと感激で涙がこみあげ、ひとりひとりと両手でしっかり握手を交わしました。この時ほどホストファミリーとしての喜びを感じたことはありませんでした。殆どの研修員とその後も交流を続け、生き甲斐を感じております。

自国を離れ遠く日本の文化に触れ、技術研修や個々の勉強に取り組んでいる研修員にエールを送りたいものです。人と人との出会いとふれ合いをこれからも大切にしてホストファミリーを続けたいと思います。



インドネシア、マレーシアの研修員とのホームパーティのひと時

福岡県京都郡豊津町
野原 咲子様

HOST FAMILY 雑感

我が家に最初に来られた研修員は中国の男性でした。英会話もままならない頃で意思がなかなか伝わらず、冷や汗をかきながら悪戦苦闘...

そこで主人がペンと紙を持ち出して漢字で筆談、途端に会話が弾み大笑い。[手話]ならぬ[紙話]で救われ、無事に切り抜けることが出来ました。HOST役も気持ちに余裕ができて、楽しめるようになってきました。食事はそれぞれの文化や宗教を配慮し、研修員の方と共に材料を買いに行きメニューを決めています。

和やかに食事が終わると、今では恒例の我がホストファミリーイベント、着物の記念撮影です。初体験の着物は皆さんに大好評で、撮影の後もなかなか着替えようとしません(笑)。

印象的だったのは、丁度ラマダンの月と重なっていて、イスラム教の研修員の方が夕方5時、解禁!?になった途端に、2本の煙草に火を付け、立て続けに吸ったことや、持参の礼拝用のミニ絨毯?と磁石で、時間になると方位を確認し礼拝を始められたことでした。

その熱心さに改めて宗教について考えさせられた次第です。後で、我が家でのコメントをゲストノートに記して頂き、その横に皆さんの写真を貼っています。帰国された方々からお便りを頂いた時など、開いたノートに研修員の一人一人が懐かしく思い出されます。「自分の家のようにリラックス出来ました」と言う研修員の方達の言葉が嬉しく、ホストファミリーとしての充実感をかみしめる時でもあります。

これからも人と人の繋がりを大切にし、会話を楽しみながら国際交流を続けていきたいと思っています。



着物姿の
ブラジル研修員(中央)

韓国中堅企業技術者研修「温暖化防止対策の行政の施策と企業の実施例」の実施



九州電力機効田発電所加圧流動床ボイラーにて(5月25日)

KITAと韓国品質財団は、両国産業の発展と民間次元の交流及び友好を増進させるため、両国間の産業技術協力を促進する提携協約を5月に締結しました。その第一

歩として今回、韓国中堅企業技術者研修を実施しました。韓国側の要望に基づき、今年2月京都議定書が発効したのを機に、地球温暖化防止対策への日本企業の具体的な取組状況と行政面の施策についての研修を行いました。

九州経済産業局が「産業界の温暖化対策に対する政府の施策と九州における対応」についての講義を行い、新日鐵(株)八幡製鐵所、日産自動車(株)九州工場、九州電力(株)効田発電所、東陶機器(株)小倉工場でプラスチックリサイクル、CO₂削減、省エネルギーの実施事例について見学しました。

研修生からは「行政や各団体からの指示目標など具体的に知りたかった」などの意見が出されましたが、全体としては種々見聞して視野を広げることが出来て良かったと感謝されました。次回10月に実施予定の研修の参考にしたいと思います。

次年度からは生産性向上など研修分野を広げ、事業を拡大発展していく所存です。

(技術協力部 木下健太郎記)

[(財)韓国品質財団から受託]

JICA九州初の日韓共同研修「大気環境保全管理」コース開催



研修員の皆さんとともに

第1回日韓共同研修コース「大気環境保全管理」がKOICA(韓国国際協力団)/韓国科学技術研究院KISTで5月22日から2週間及びJICA

/KITAで6月5日から2週間、開催されました。

今回はアジア9カ国(フィリピン、インドネシア、タイ、中国、モンゴル等)の行政及び研究機関の中間管理者15名が参加しました。

この研修は1998年の日韓共同宣言に基づき、KOICA

の提案で2005年以降の新事業として設けられ、大気環境改善・公害克服の実績を持つ北九州が舞台となりました。

研修では、韓国側は国レベルの行政施策、都市型大気汚染及び健康被害等の講義を主に、日本側はこれを補完する立場で地方自治体の環境行政、企業の汚染防止対策及び自動車排ガス規制等の現場研修に重点をおきました。

今年の日韓国交正常化40周年の節目の年であり、本研修は開発途上国の人材育成だけでなく、両国のパートナーシップ強化も期待されています。初の試みでしたがKOICA・KISTとの良き連携で、所期の目的を達成したといえます。

(KITA研修部 西野 靖記)

[JICAから受託]

清水前副理事長からKITAへ寄付

昨年10月に退任されましたKITA前副理事長清水泰様から、クリーナープロダクション振興に役立ててほしい

と、100万円の寄付をいただきました。ありがとうございました。

KITA人事異動

退任	KITA生産性協力センター所長	秋月 影雄(3月31日付)
新任	コースリーダー	植山 高次(4月1日付)
	技術協力部長兼務	河野 拓夫(4月15日付)
	KITA生産性協力センター副所長(兼 技術協力部副部長)	木下健太郎(4月15日付)
	技術協力部	田中 伸昌(6月1日付)
	技術協力部兼務	工藤 和也(7月1日付)

編集後記

蒸し暑い日本の毎日に“クール・ビズ”の人気定着化傾向は、最近珍しい政治的ヒット商品。前回の轍を踏まぬ周回演出とタイミングに進歩の跡がにじむ。

先月末開催のKITA理事会で、平成16年度事業報告と決算および平成17年度事業計画と予算が承認され、新体制で力強く展開しています。

24年間で3,815名もの研修員がKITAから世界に巣立ちました。日本の技術や社会を見聞し、彼我の違いに思いをはせながらもそれなりに理解し、日本を好きになって帰国する姿に、いつも関係者のご努力と思い重なり、ほっとします。

今後の広報誌発行について、小誌にも触れましたが、従来からの日本語版は年4回から2回とし、新たに海外向け(英語版)を年2回作る方向で検討しております。お許しを得ながら今後もご協力下さいますようお願いいたします。(N)